頃八七月十五日夜の月も隈なく冴えわたり昼の
力も始終打命を八人の者共能登守の居る方へ走り
て二三人面附きて居る所を能登守物ともせず捻倒んで
二三官打ち込みうてて叫ぶ声を聞て四五人の者も
前後左右より一度に組付き打倒さんとしけるを能
登守物ともせず跳倒し別倒し義之へ飛んで掛る
義之は弟を伴連て叫びて言葉も思ひ切て迫ぬ
ばとて逃げず無双の力もて立ちつき蓬ち悟き
けるを能登守思ひ切る太刀の切先二尺四五寸

廻りけるたひらと面付きあるを能登守聞
と驚き打きみる程に義之云ふ小枝されじと立ち合
ふかとて打ちのむ二尺程間に成て棒打ち掛け
ばば能登守も腰を落して退きけり義之云ふ
機逸さじなれば長びかして能登守力の程ものびる
よりも拔群の術なり日外手日置流の弟も備
来る味方の野を立方に二人とて搦立てし道
理なりとて則ち前へ召寄せられ御褒美の品賜り
けり能登守ネ子なりしかあるべきなりし次第なり清士美